

## The Secret Garden 研究

——帝国、階級、ジェンダーの観点から

香山はるの

Frances Hodgson Burnett (フランシス・ホジソン・バーネット 1849-1924) は、現代では主に児童文学作家としてその名を記憶されている。主要な作品としては、一八八六年に書かれ英米で爆発的な人気を博した *Little Lord Fauntleroy*、*A Little Princess*<sup>①</sup>、そして一九一一年の *The Secret Garden* があるが、中でも *The Secret Garden* は、Mary Lennox (メアリ・レノックス) という複雑なキャラクターが大きな魅力となっており、今日バーネットの代表作として考えられることが多い。U.C. Knoepfelmacher は、「Little Girls Without Their Curly」というエッセイの中で、一八六五年に Lewis Carroll (ルイス・キャロル 1832-1898) の *Alice's Adventures in Wonderland* が出て以来、児童文学でも、臆せず怒りや憎しみを表現するような自己主張の強い少女が描かれるようになったと指摘しているが<sup>②</sup>、確かに *The Secret Garden* の冒頭で、バーネット

トがメアリが傲慢で不機嫌で、おまけに不器量な、およそ「可愛らしくない」子供、従来の少女小説に出てくるようなヒロインらしくらぬ少女であることを強調しているのは興味深い。*The Secret Garden* はこの横柄な黄色い顔をしたやせっぽっちの少女が、「秘密の花園」を通じて自己発見をし、さらには他人の成長をも促すようになっていく過程を描いた物語である。しかし、一方でこの「型破りのヒロイン」をめぐる感動的ともいえるストーリーが、様々な形の葛藤や矛盾をはらんでいることは重要である。本稿ではこの点に注目し、特に、帝国、階級、ジェンダー、の観点から考察していきたいと考えている。

植民地インドから来たメアリは、当初その「黄色い」顔が示唆するように、母国でありながら、イギリスの習慣や流儀を殆んど身につけていなかった。たとえば、象嵌細工の家具や象牙で作っ

たゾウの置物のあるミッスルスウェイト屋敷の「リトル・インディアンのルーム」は、当時の大英帝国の威信と繁栄を象徴的に物語るものであるが (Phillips, 196)、イギリス軍人の娘として、統治下インドで育ったメアリは「ミッシー・サーピフ (お嬢様)」と呼ばれ、乳母アーヤをはじめとするインド人たちにかしずかれる、いわば我儘放題の生活しか知らず、イギリスでの新しい生活になかなかなじめない。実際、メアリは「故郷」に対する「帰属意識」というものを持ったことがなく、たとえば第二章で、世話になったイギリス人牧師の家の少年バジルに、「おまえ、国に送り返されるんだってさ……みんな大喜びさ」と言われる場面で、咄嗟に「国(こくに、どこのよ?)」と言い返しているのは印象深い (10)。さらに、病気がちで多忙な父親と、育児を放棄しパーティに明け暮れる母親を持った彼女は、自分が「だれかの子供」(13) だという意識すらなかったという。無意識にもこうした不安定さを埋めあわせようとするかのごとく、奴隷のように服従する召使いたちを「ブタ」と罵り、暴力すら振るってきたメアリであったが、ミッスルスウェイト屋敷に来て最初に学んだことは、こうしたインド的な流儀が母国イギリスでは全く通用しないということであった。たとえば、人の良いヨークシヤ娘の Martha Sowerby (マーサ・サワビー) は第四章で初めて登場した場面から、メアリの意のままに動かせる召使いでないことを、純朴な態度で示している。庭師の Ben Weatherstaff (ベン・ウェザースタッフ) についても同様

である。無愛想なベンは、齒に衣着せぬ物言いでメア리를驚かせ、生まれて初めて自分自身について考えさせるのだ。「お前さんとわしは、そっくりだ。似た者同士じゃ。不細工だし、見てくれも悪けりゃ、愛想も悪い。氣立てが悪いんじやな、お互いに。[37]」メアリは、自分を理解してくれる者がいない孤独を紛らわすように、閉ざされた「秘密の花園」を探し出し、庭を耕し慈しむことで癒され、成長していく。そして、こうした自然との触れあいに加え、マーサの弟で「牧神パン」(Foster, 187) を思わせる自然児 Dickon (ディコン) や病弱で人目を避けて生活するいとこの Colin (コリン) と育む友情もメアリのさらなる変化、改善を促していく。<sup>3)</sup>「ムーアの外れの小屋に住むただの男の子」(“common cottage boy off the moor” [148]) デイコンと、六〇〇年もの歴史を誇り、一〇〇

〇近くの部屋のあるミッスルスウェイト屋敷の跡取りコリン、そしてインド出身の孤児メア리를結びつける庭は Fred Ingis の言うように、階級やジェンダーに縛られない「エデンの園」(176) とも思われる。

しかし、一方でこの物語にはこうしたプロットの流れと逆行するかのように、伝統的、因習的な規範へ回帰しようとする動きがあることも見落としてはならぬ。(Foster, 179)。たとえば、メアリはデイコンと親しくなり、彼のヨークシヤ訛りをまねて話すようになるが、それは「インドでは現地の言葉を使って話しかけると、きまつて現地人が喜んだ」という「目上」或いは「支配階級」

としての経験によるものである (Phillips, 185)。また、バーネットのコリンの描き方、扱い方も複雑である。

一言で言えば、バーネットは、コリンの傲慢、我儘が、同じくらい傲慢で我儘だったメアリによつて矯正されていく過程を賞賛する一方で、この若き「ラー ज्या」(“Rajah”)の誇りを必ずしも否定はしていない。たとえば、コリンが歩けるようになった直接のきっかけは、「目下」であるベン・ウエザースタッフの言葉(「かわいそうなかたわ者」[186])に自尊心をひどく傷つけられたからである。また、召使いに尊大な態度で命令を下すコリンは随所で皮肉をこめて描かれているが、同時に、彼の健康の回復にベンが涙を流す場面には、ミッスルスウェイト屋敷の世継の復活、すなわち、イギリス支配階級の基盤の安定を素朴に望む姿勢が強く表れているのを見逃すことはできない。

実際、Elizabeth Lennox Keyserをはじめとする多くの批評家が指摘してきたように、物語の後半ではコリンがメアリに代わって、実質「主人公」の役を果たしているのは、興味深い(2)。これは、最終章で「魔法」の力を説き、「科学的な実験」を推し進めるコリンがメア리를競走で負かす場面に、象徴的に表れている。また、「聖なる地母神」(“the archetypal Earth Mother”) [Bixler, Frances Hodgson Burnett, 99] とも言える Susan Sowerby (スーザン・サワビー) の描写に代表されるように、この物語は概して「母性」を称えるものであるが、メアリーもまた、コリンを介護し、イン

ドで覚えたヒンドスタニー語の子守唄を歌って聞かせる「乳母」或いは「母親」の役を務めているのは注目に値する (Kutzer, 62)。言うなれば、メアリーがインドからもたらした「魔術」も時折見せる「母性的」な態度も、この弱々しくヒステリーで扱いにくい「ラー ज्या」をミッスルスウェイト屋敷の未来の主たるにふさわしい、「健全なイギリスの少年」にするために発揮されているのである。事実、小説のエンディングでは、メアリーはデイコンとともに物語の前景から姿を消してしまう。そして、広大な屋敷の敷地を父親クレイヴン氏と「コリン坊ちゃま」(“Master Colin”) が力強く闊歩する結末は、父と子の絆の確立、さらには父権制の保持を示唆していると考えられる (Foster, 189)。このように、物語が進むにつれ、その世界は保守的な色合いを強めていくのである。

こうした観点から見ると、デイコンとメアリー、コリンが蘇らせた「秘密の花園」も究極的には、東の間の「ユートピア」(Ingis, 123)に過ぎなかつたと言えるであろう。たとえば、第十九章では、メドロック夫人を通して、スーザン・サワビーの「オレンジ」の話が印象深く語られる。サワビー夫人は十二人の子持ちであるが、以前子供たちが喧嘩をしたとき、次のように論じたという。

「……学校に行つたころ、母ちゃんはな、地理で、この世界は一個のオレンジみたいな形をしとる、と教わつた。そのオレンジを丸々一個全部自分のものにするなんてことは、誰

にもできんー母ちゃんは十とにもならんうちからそんなことはわかっとつたよ。みんな、自分の分おつてもんがあるんだ。それでも行きわたらんと思うことだつてある。だけど、お前たちーお前たちみんなだよーまちがつても、オレンジ一個全部自分のもんだなんて思っちゃあいけない。そんな考えしとると、きつと間違いだつて思い知ることになるよ、痛い目におうてね」(172)

これはある意味では、「ラージャ」コリンと「ミッシー・サーピフ」メアリが学ばなければならなかった教訓であり、実際二人はそれぞれ「特権階級」としての自己中心的な態度を矯正されるのであるが、既に示唆したように、物語は同時に異なる解釈をも指し示している。たとえば、子供たちが創った、ジェンダーや階級の違いを超えた「ユートピア」の世界も究極的には、クレイヴン氏に代表される大人がそれに加わるとき、事実上崩壊すると考えられる (Foster, 188)。それは、ミッスルスウェイト屋敷の当主の帰還により、コリン、メアリ、デイコンの間にある様々な社会的相違がもはや看過できないものになってしまうからである。すなわち、物語の結末では、イギリスの国花であるバラが咲き誇る庭で、アーチボルド・クレイヴン氏ーコリンとつながる父権制度が支える「帝国」が、「植民地」出身の少女メアリ、そして、デイコンやベン、マーサといったその他大勢の「労働者階級」を従え、繁栄

していくイメージが浮かび上がってくるのである。

*The Secret Garden* には、*Little Lord Fauntleroy* や *A Little Princess* と同様、祖国を離れ、アメリカに渡ったバーネットのイギリスやその伝統的な価値観に対するノスタルジアが感じられる。たとえば、*Little Lord Fauntleroy* では、アメリカ育ちのセドリック (Cedric) の人を疑わない純真な態度が、横暴な祖父ドリンコート伯爵 (the Earl of Drincourt) の冷たい頑なな心を打ち解かすことによって、イギリス貴族階級に新たな生命を吹き込む。また、*A Little Princess* では、ヒロイン、セアラ・クルー (Sara Crewe) が気高い心と豊かな想像力を失わずに逆境に立ち向かい、幸運にも父親の残した財産を回復し、再び「リスベクタブル」な階級に舞い戻る。そして、セドリックやセアラの周りには、イギリスの宮中の記事を愛読するアメリカ人ホップス氏 (Mr. Hobbs) や、忠実なインド人の召使いラムダス (Ram Dass)、セアラを支える貧しい娘、ベッキー (Becky) らがいるのである。こうした角度から見ると、概してバーネットは、帝国イギリスの支配システムの強化を支持したと考えられるかもしれない。

しかしその一方で、*The Secret Garden* には、*Little Lord Fauntleroy* や *A Little Princess* には際立って見られなかったある種の葛藤や矛盾が色濃く出ている。それは既に示してきたように、主に、メアリとコリンの扱いに顕著に表れている。以下、この点をあらためて強調したい。

本稿の冒頭でも述べたが、おそらく多くの読者は *The Secret Garden* の大きな興味は、いわばジェーン・エア (Jane Eyre) を上回るほどの強情で愛想のないメアリのキャラクターにあると感じるのであろう。<sup>(5)</sup> そして、それは、一言で言えば、Keyser が指摘するように、メアリがいわゆる「女の子らしい女の子」のステレオタイプから外れているという点に集約される<sup>(6)</sup>。閉ざされていた「秘密の花園」を一人で探しあて、その庭を蘇らせるメアリの「独立心」、叔父クレイヴン氏からの贈り物が「人形」でなく「本」であったことを喜ぶ彼女の「知性」は、たとえば *Little Lord Fauntleroy* に登場する「家庭の天使」のようなエロル夫人 (Mrs Errol) や *A Little Princess* の救い出される「シンデレラ」のセララには見られない新鮮な魅力を放つ (Keyser: 9)。また、当初この作品には *Mistress Mary* という題が考えられていたという事実も、メアリのキャラクターの重要性を物語るものにほかならない (Knoepfelmacher: 22)。しかしながら、これまで見てきたように、物語の後半では、それまで生き生きと活躍していたメアリが影を潜め、健康を回復し「良い少年」になったコリンがむしろ中心的なキャラクターになっていく。Elizabeth Lennox Keyser はこの点を、バーネットの、特にジェンダーに関わるアンビバレンスに依るところが大きいと示唆している (9-10)。すなわち、幼いときから母親に「レディ」のように振舞うように諭され、結婚後も当時の「理想的な女性」を演じようとしたバーネットは、独立心旺盛

で自己主張の強いヒロインの活躍を描き切ることができなかったと思われる (Keyser: 10)。また、結末におけるコリンのめざましい健康の回復には、十五歳の若さで病死した長男 Lionel (ライオネル) に対するバーネットの叶うことのなかった切実な願いの反映を見ることができるとであろう (Keyser: 10)。Ann Thwaite の伝記 *Waiting for the Party* に詳しいが、一八八六年の *Little Lord Fauntleroy* 以来、一躍人気作家となったバーネットは、英米を行き来し華やかな社交生活を送るいわば、「不在がちな母親」であり、一八九〇年にライオネルが肺結核で死去した後は、激しい喪失感と息子を救えなかった罪意識に苛まれたという (134-135)。

バーネットは *The Secret Garden* において、型破りのヒロイン、メア리를描くことで、階級やジェンダーなど社会的な縛りから解放された理想の「庭」を探求したが、他方では、上に記したような彼女の様々な複雑な思いがこの動きを押し戻し、作中に興味深いテンションを生み出しているのである。

注

(1) *A Little Princess* は、バーネットが一八八八年に発表した *Sara Crewe* という中編小説を戯曲化し、さらにそれに新たな登場人物やエピソードを加えて、長編として書き直したものである。

(2) テキストには、Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden* (New York: The Modern Library, 2003) を使用した。なお、日本語訳は土屋京子訳『秘密の花園』(光文社、二〇〇七年)を参考にさせていただいた。

(3) たゞさは、顔色が良くなり、かひなくして「可愛らしく」なつてく

くメリの變化は、インテから来たもの「うちで曲がり」の少女が「キリス化」＝「文明化」をたづねく過程を解釈しよう。

(4) *The Secret Garden* のおける「母性」について、Shirley Foster and Judy Simons, *What Katy Read: Feminist Re-Readings of "Classic" Stories for the Girls*, 186を参照せよ。

(5) たゞさは、Ann Thwaite の小説への批評家が、*The Secret Garden* に *Jane Eyre* の議論を引く。 *Waiting for the Party*, 220-221.

(6) *Frances Hodgson Burnett* の中で、Phyllis Bixler が、ソーネットが男性の支配に対する怒りを抱きながら、世間に対しては、「態度に女性として」ソブリット・イメージを張ることを示唆している。122-23を参照。

(7) これは、最初の夫 Swan Burnett (スワン・ソーネット) との不和を関係づけるべきである。

参考文献

Bixler, Phyllis. *Frances Hodgson Burnett*. Boston: Twayne, 1984.

———. "Gardens, Houses, and Nurturant Power in *The Secret Garden*."

*Romanticism and Children's Literature in Nineteenth-Century England*.

Ed. James Holt McGavran, Jr. Athens: U of Georgia P, 1991. 208-224.

Burnett, Frances Hodgson. *The Secret Garden*. New York: The Modern Library, 2003.

Foster, Shirley and Judy Simons. *What Katy Read: Feminist Re-Readings of "Classic" Stories for Girls*. London: Macmillan, 1995.

Inglis, Fred. *The Promise of Happiness: Value and Meaning in Children's*

*Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 1981.

Keyser, Elizabeth Lennox. "Quite Contrary": Frances Hodgson Burnett's *The Secret Garden*. *Children's Literature* 11 (1983): 1-13.

Knoepflmacher, U.C. "Little Girls Without Their Curfs: Female Aggression in Victorian Children's Literature." *Children's Literature* 11 (1983): 14-31.

Koppes, Phyllis Bixler. "Tradition and the Individual Talent of Frances Hodgson Burnett: A Generic Analysis of *Little Lord Fauntleroy*, *A Little Princess*, and *The Secret Garden*." *Children's Literature* 7 (1978): 191-207.

Kutzer, M.Daphne. *Empire's Children*. New York: Garland, 2000.

Phillips, Jerry. "The Men Sahib, the Worthy, the Rajah, and His Minions: Some Reflections on the Class Politics of *The Secret Garden*." *The Lion and The Unicorn* 17-2 (1993): 168-194.

Thwaite, Ann. *Waiting for the Party: The Life of Frances Hodgson Burnett 1849-1924*. London: Faber & Faber, 1994.